**19 『宇津保物語』**

、琴どもを試みたまふに、どろかしき声で。おどろきたまひてのたまはく、「この琴どもは、いかで造りしぞ。手触れで久しくなりにけるに、声もらまず、つながら同じ声には、いかでととのひたるぞ」と問ひたまふときに、りしやうを詳しく(ア)奏す。帝、大きにおどろかせたまひて、感ぜしめ  
(イ)きこしめすこと限りなし。「これが声、まだなれずなむある。ととのヘて(ウ)奉れ」と仰せらるるときに、、た風を(エ)たまはりて、いささかかき鳴らⓐして一つを弾くに、の上の、砕けて花のごとく散る。いま一つ仕うまつるに、六月中の十日のほどに、雪のごとくりて降る。

帝、大きにおどろきてのたまふ、「げにこの調べはめづらしき手なりけり。これはいこくといふ手なり。せこゆくはらといふ曲なり。の帝の①弾きたまふに、瓦砕けて雪降るとなむいひたる。この国にいまだ見ぬことを、②あやしうめづらしき人のかな。昔、たび試みせしにも、その道のめづらしうれたりしかば、をもその道にたまひ、学士をも仕うまつらするに、の道はすこしたぢろぐとも、の筋は多かり。この琴は、この国に俊蔭一人こそありけれ。③学士をかヘて、琴の師を仕うまつれ。悟りあるなり。ものの師せむ人のいたすべき皇子にあらず。心に入れて残す手なく仕うまつらせたらば、の位たまはせむ」とのたまふとき、俊蔭申す。「年いときなきほどに、父母を離れて、唐土ヘ渡されぬ。たの風、大いなる波にはされて、知らぬ国に打ち寄せらる。深き悲しび、これに過ぎたるはなし。からくⓑして帰りまうで来たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る。むかし、にかなひて、たびたびの試みをたまはりて、唐土に渡されぬ。父母あひ見ずして、長く別れて、悲しびはあまりありといヘども、ねび仕うまつるいさみはなし。の罪には当たるとも、④この琴はまねび仕うまつらじ」と申ⓒして、まかり出でぬ。

語　注

おどろかしき声＝心揺さぶられるような音。

しらまず＝衰えず。

七つながら同じ声には＝（献上された）七つとも同じようにすばらしい音を出すように。

ありしやう＝かつて琴を習ったときの有様。

せた風＝琴の名。

大曲＝楽章の構成単位である帖が多い曲。

衾＝綿入れの布団のこと。

ゆいこくといふ手＝ゆいこくという琴の奏法。

くせこゆくはら＝曲の名。

二たび試みせしにも＝俊蔭が十二歳の時、進士と秀才の二度の試験をしたことを指す。

その筋＝その方面（の人材）。

あたの風＝逆風。

まねび仕うまつるいさみ＝自分の習ったことをそっくり伝え申し上げる積極的な気持ち。

問1　二重傍線部ⓐ～ⓒ「して」の文法的説明として適当なものを次から選べ。（2点×3）

ア　サ行四段動詞の連用形＋接続助詞

イ　サ行変格動詞の連用形＋接続助詞

ウ　格助詞　エ　接続助詞

オ　副詞の一部

ⓐ〔　　　〕　ⓑ〔　　　〕　ⓒ〔　　　〕

問2　波線部(ア)「奏す」、(イ)「きこしめす」、(ウ)「奉れ」、(エ)「たまはり」は、誰から誰に対する敬意を表した語か。それぞれ次から選べ。（4点×4）

ア　帝から俊蔭　　イ　俊蔭から帝　　ウ　帝から帝

エ　作者から帝　　オ　作者から俊蔭

(ア)〔　　　〕　(イ)〔　　　〕　(ウ)〔　　　〕　(エ)〔　　　〕

問3　傍線部①「弾き」と同じ意味で使われている単語が、これより前の部分に、「弾く」を除いて三語ある。これらをすべて本文中からそのまま抜き出せ。（3点×3）

〔　　　　　　　　　　〕〔　　　　　　　　　　〕〔　　　　　　　　　　〕

問4　傍線部②「あやしうめづらしき人の才かな」とあるが、誰のどういう才能のことを言っているのか。「あやしう」の内容を明らかにして説明せよ。（6点）

〔

〕

問5　傍線部③「学士をかヘて、琴の師を仕うまつれ」の意味として適当なものを次から選べ。（6点）

ア　おまえは、今まで東宮の儒学の師であったが、これからは琴の師として務めよ。

イ　おまえは、今まで東宮の琴の師であったが、これからは儒学の師として務めよ。

ウ　おまえは、これまでの儒学の師の務めに加えて琴の師も務めよ。

エ　今までの東宮の儒学の師も琴の師もみな辞めさせてしまえ。

オ　東宮の儒学の師よりも、琴の師とすべき者のほうを集めて参れ。

〔　　　〕

問6　傍線部④「この琴はまねび仕うまつらじ」とあるが、このように言う理由として適当なものを次から選べ。（7点）

ア　この琴の秘技を伝えることができるのは自分しかいないことを誇示したかったから。

イ　ほかでもない帝の仰せごとなので、しぶしぶながらも引き受けなくてはいけないと判断したから。

ウ　あまりにももったいない仰せごとであったので、態度を保留したかったから。

エ　自分は、琴の秘技を教える気にはならないので、固くご辞退するつもりだったから。

オ　自分の技量ではとてもこの琴の秘技をお伝えする自信がないので、お断りしたかったから。

〔　　　　〕

練習問題〈語の識別①「して」〉

次の傍線部「して」の説明を後から選べ。

①ただ仮の庵のみのどけくして、恐れなし。 （方丈記）

訳　ただこの仮の住まいだけは平穏で、心配無い。

（　　　　）

②二人して結びしをひとりして解き見じ直にあふまでは （万葉集）

訳　二人で結んだ着物のひもを私ひとりで解いたりしない。直接逢うまでは。

（　　　　）

③男もすなるといふものを、女もしてみむとて、するなり。 （土佐日記）

訳　男も書くという日記というものを、女（である私）も試しに書いてみようと思って、書くのである。

（　　　　）

④これはがにしてむ。 （枕草子）

訳　これは隆家の言ったことにしよう。

（　　　　）

ア　サ変の連用形＋接続助詞

イ　サ変の連用形＋完了（強意）の助動詞「つ」の未然形

ウ　接続助詞

エ　格助詞

【解答】

問1　ⓐ＝ア　ⓑ＝オ　ⓒ＝ア

問2　(ア)＝エ　(イ)＝エ　(ウ)＝ウ　(エ)＝エ

問3　試み　かき鳴らし　仕うまつる

問4　大殿の上の瓦が花のように砕けて散ったり、夏の頃に雪がふとんのようにかたまりになって降ったりするような不思議を引き起こすほどの俊蔭の琴の才能のこと。

問5　ア　　　問6　エ

【練習問題解答】

①ウ　②エ　③ア　④イ